

2025 年 JWDA／広報普及啓発部会東北・仙台視察会報告書

【開催概要】

「木とともにある未来へ ～杜の都で紡ぐ建築のヒント～」

— 東北・宮城の木造建築と地域材活用の現場から

内 容:

- 仙台市で開催する花粉症対策イベントとの連携によりスギ材等活用事例の視察と共に、東北の木材・住宅関係者との交流を深める機会を得る。
- 地域の森林資源の活用に明確なビジョンをもつ森林循環・SDGs 取組みの先行事例を学習することを通じ、会員のビジネスに活かす「気づき」を得る。
- 震災から14年経った東北に、新たに造られた木造建築やウッドデザイン賞受賞作品を視察することにより、地域産材利用の価値向上の可能性について知見を高める。

日 程:2025 年 5 月 22 日(木)～23 日(金)

主な視察先:宮城県

仙台市、登米市、南三陸町、芝田町

参加者: 13名

企 画:広報普及啓発部会

【スケジュール】

5月22日(木)

- 10:10 くりこま高原駅 出発
- 10:30 視察①「JA みやぎ登米本店 東部なかだ基幹支店」(2024 年 WD 賞受賞作品)見学
- 11:45 視察②みやぎ明治村 伝統芸能伝承館「森舞台」(隈研吾氏設計)見学
- 13:10 視察③「登米懐古館」(隈研吾氏設計)見学
- 14:00 視察④南三陸 さんさん商店街『復興のシンボル』見学
- 16:30 視察⑤芝田町「さとのえ」(2023 年 WD 賞環境大臣賞受賞作品)

5月23日(金)

- 8:00 ホテル出発
- 9:00 視察⑥「PARKWOOD 高森」(2019 年 WD 賞農林水産大臣賞受賞作品)見学
- 10:30 視察⑦ウッドライズ仙台 (2024年 WD 賞受賞作品)見学

13:00 視察⑧「WOOD DESIGN EXPERIENCE @仙台」見学

セミナー聴講

16:00 セミナー終了後解散

17:00 交流会(任意参加)

18:30 交流会終了後 解散

【報告】

1 日目:5月22日(木)

視察①『JA みやぎ登米本店 東部なかだ』基幹支店 視察(2024年 WD 賞受賞作品)

HP: [JA みやぎ登米支店 ニュース](#)



案内人：株式会社関・空間設計 設計監理リーダー 三浦 高史氏

みやぎ登米農業協同組合 総務部 経営企画課 課長 平井 信悟氏

みやぎ登米農業協同組合 総務部 経営企画課 課長補佐 坂本 啓氏

施設概要： みやぎ登米農業協同組合の施設を、地域産の登米杉を活用した木造建築で建て替えた。伝統的な「寄り合い」の概念を現代的に再解釈し、多世代が交流できる「ヨリアイ」の場を設計。二棟の切妻屋根の建物が「ヨリアイホール」でつながり、農村の風景に馴染む構造を実現した。

内 容： 栗駒山を望むのどかな田園の開放的な立地に建てられている『JA みやぎ登米本店 東部なかだ』基幹支店。



敷地形状に沿って切妻屋根の事務棟が 2 等配置されている。

8m スパンの梁間設計を実現するために束ね柱、重ね梁、重ね肘木による架構を採用。全体量の 90.89%にあたる登米産FSC認証材を使用しており、国内初のパーセンテージ表示のプロジェクト認証を取得している。



この地域産材の使用には、「農業と林業が支えあわなければ地域は生き残れない」という農協の考えが反映されており、計画段階から市内の 4 森林組合等で作る登米市森林管理協議会と協議を重ね、計 708 m³の地元森林認証材を確保することに成功した。

切妻屋根を活かし、自然光を取り込みやすい形状と配置を採用。南向きの開口部が多く、昼間の大半を自然光で過ごせるよう設計されている。



ヨリアイホールや事務スペースには高窓(ハイスайдライト)を設け、やわらかい自然光を上から取り入れている。木の柱や梁で遮られず、拡散光として室内に届く工夫がされている。

外部には深い庇(ひさし)や縦ルーバーを設置し、夏場の直射日光を遮蔽。冬場は太陽高度が低くなるため、逆に奥まで日射を取り込めるようになっており、季節ごとの快適性に配慮されている。



木造建築の特性を活かし、内部の杉材が湿度調整機能の役割を担っており、各エリアごとに空調ゾーンを分け必要な場所にだけ熱暖房を聞かせることでエネルギーの消費を抑えている。



考 察： 建物は木造でありながら 16m スパンの大空間を実現しており、在来軸組工法の可能性を再認識させられた。中央の「ヨリアイホール」は象徴的な束ね柱と肘木構造により、視覚的なインパクトと空間的な広がりを両立していた。

使用されている木材のうち約 9 割が FSC 認証を受けた地元産であり、これは地域林業と連携した持続可能な建築の先進例といえる。自然光が効果的に取り入れられ、昼間は照明不要なほど明るく、省エネルギーへの配慮も感じられた。

ホールに立つと、木の香りと柔らかな光に包まれ、どこか懐かしさと安心感を覚える空間であった。JA の業務だけでなく、地域の集会や子どもたちのイベントにも活用されており、まさに“地域のよりどころ”として機能していると感じた。



木造でここまでの規模・機能・快適性を備えた建築が可能であることに驚かされた。今後の公共施設設計においても、地元材の活用や人と環境にやさしい建築が主流になっていくべきだという実感を得た。建築が地域社会に果たせる役割の大きさを改めて感じさせる見学となった。



視察②みやぎ明治村 伝統芸能伝承館 森舞台』

H P: [みやぎの明治村](#)



施設概要： 登米能をはじめとする伝統芸能の継承を目的に建設された能舞台。
建築家・隈研吾氏が設計し、日本画家・千住博氏が鏡板を手がけた。毎年 9 月には「登米薪能」が開催され、かがり火のもと幻想的な雰囲気が楽しめる。

案内人： みやぎの明治村 中野様

内 容： 2013 年、宮城県登米市が伝統芸能の継承と地域活性化を目的に整備した文化施設の一環として、隈研吾氏が設計を担当した。伝統的な能舞台の様式を踏襲しつつ、現代の技術や環境配慮も融合させている。



森の中に建つ舞台として、周囲の自然環境との一体感を大切に設計。地元宮城県産のヒバ材を主に使用し、屋根は登米町特産の天然スレート葺き。腰板を排し、床下には瓶を配置するなど、伝統的な音響効果も意識している。2013年に千住博氏による松の絵が描かれ、舞台の象徴となっている。2021年に放送されたNHK宮城県制作のドラマ『おかえりもね』は、地域の伝統や暮らしをテーマにした作品で、森舞台が重要なロケ地として使われた。



考察： 森舞台は、隈研吾氏による伝統的な能舞台の様式美を尊重しつつ、現代の素材感や機能性を巧みに取り入れた作品。木造軸組構法や地元産材の活用、そして伝統的な音響効果の再現など、古典の技術を現代に蘇らせた。これにより、単なる歴史の再現ではなく、現代の利用者に適した空間として新たな命を吹き込んでいる。「森舞台」は能楽という伝統芸能の継承拠点であると同時に、地域文化の発信拠点として機能している。能舞台としての格式を保ちながらも、地域の観光資源としても活用され、NHKドラマ『おかえりもね』のロケ地にもなったことで広く認知。文化施設が地域のブランド価値を高め、地域活性化に寄与している点は非常に意義深いといえる。また、木造建築であるための丁寧なメンテナンスや伝統技術を活用した維持管理は、建築物の長寿命化に寄与するだけでなく、地域の職人技術や知識

の継承にもつながっている。伝統と現代、自然と人間、文化と地域社会が巧みに融合した象徴的な建築であり、これからも地域の文化的誇りと活力となる役割を果たしそうだ。



視察③『登米懷古館』

HP: [登米懷古館](#)



施設概要: 米懷古館は、宮城県登米市に所在し、江戸時代から明治期にかけての歴史資料や地域文化を保存・展示する文化施設。建物自体が歴史的価値を持つ構造で、地域の伝統的な建築様式を良好に保存している。

地上2階建てで、寄棟屋根が重なり合う特徴的なデザインを持ち、壁式鉄筋コンクリート造を主体とし、木と鉄骨を組み合わせた構造を採用している。

昭和36年に建立され、令和元年に建築家・隈研吾氏の設計で移転新築した。

内 容： 登米懷古館は、隈研吾氏の設計により、伝統的な日本の建築様式と現代的な機能性が見事に融合している。木材を主体とした構造と、自然光を取り入れた開放的な空間が特徴。地元の素材を積極的に使用し、周囲の自然環境との調和を図っている。これにより、地域の文化や風土を反映した建築が実現されている。隈研吾氏は、単に建物

を設計するだけでなく、その土地の歴史や文化を深く理解し、それを建築を通じて表現・継承することを重視している。



登米懐古館は地域の歴史資料を収蔵し、伝統文化の発信拠点として重要な施設。隈氏はこうした文化的価値の継承に寄与したいという思いから設計に携わったと考えられる。

考察：「地域素材の活用」や「自然との共生」を実践し、登米の風土や伝統に根ざした建物を創り上げ、環境への配慮や持続可能な設計も重要視しており、地域社会の復興や活性化に貢献するという社会的使命が背景にあり、隈氏がかかわったと考えられる。木材や石材などの自然素材を多用し、周囲の環境や歴史的文脈と調和する建築を通し、地域の歴史的価値を守りながら、未来へつなぐ役割を果たしている。



視察④『復興のシンボル』 南三陸 さんさん商店街(2017 年竣工)

HP: [さんさん商店街](#)

[南三陸町東日本大震災伝承館](#)

施設概要 2011 年の東日本大震災で壊滅的な被害を受けた南三陸町の再生プロジェクトとして再建された。志津川地区と歌津地区の商店街が、10 メートルの盛土上に新たに誕生し、地元の南三陸杉を使用した在来木造の「縁側」を特徴とするデザインが施された。これにより、商店と街路をつなぐ新たな中間領域が生まれ、海との一体感も再生された。地域の人々の海への愛を反映し、地域の活気を取り戻す商店街として復興の象徴となった



考 察： 東日本大震災からの復興の象徴として建設された「さんさん商店街」は、開業から約 10 年が経過し、地域の生活や経済の中心として確固たる役割を果たしている。

建築的には、木造を基調とした市場を思い起させるデザインが地域に馴染み年月の経過とともに地域の「資産」としての価値を深めている。とはいえ、素材の劣化や防腐処理など、建物の維持管理は今後も重要な課題。

こうした建築資産を次世代に受け継ぐことは、地域の誇りと安全を守るうえで不可欠ではあるが、地域の世代交代により、商店街の運営やコミュニティの担い手も移り変わりつつあり、経年変化の管理を引き継ぐ必要があると商店街の方は語っていた。震災を経験した世代から新たな世代へ復興の歴史と地域文化を継承しながら、新しい活力をもたらすことが、さんさん商店街の持続的な発展にとって重要な要素となっている。

また、さんさん商店街のにぎわいエリアと、旧防災対策庁舎を中心とする震災復興祈念公園を結ぶ人道橋は隈研吾氏の設計で、さらに上山八幡宮へと続く参道

になっている。木と鉄を組み合わせた美しい構造で、上下二層の反り橋が一体となっており、南三陸杉が使用されている

また、「南三陸東日本大震災伝承館」といった施設にも南三陸杉を活用され建築されており、地域の木材資源再生と文化再生の両輪を象徴。これを通じた地域アイデンティティとしての役割を果たしている。



これらの施設は震災の教訓を未来へ伝えるとともに、防災意識の向上や地域の結束を促進する役割を担っている。商店街がこれらの施設群と一体となって、単なる商業の場を超えた「復興のシンボル」としての機能を果たしている。



さんさん商店街という建築物は、南三陸の持続可能な復興と地域社会の発展を支える重要な拠点となっている。



視察④『森の麓の拠点「さとのえ」』(2023 年 環境大臣賞 受賞作品)

HP: [坂元植林の家](#)



施設概要 1800 年代から植林を続けてきた自社林の麓に設立された施設であり、母屋とエネルギー棟で構成されている。都市生活者や子育て世代を対象に、森林散策や自然と共生する暮らしを体験できる場を提供している。



地域の団体と協働し、持続可能な生活を志向する人々に向けたワークショップやツアーを開催し、木や森への理解を深める活動を行っている。

建築面では、フィールドワークや調査結果を反映した設計を行い、地域産材の使用や地元の職人による施工により、環境負荷の低減と地域産業の活性化を実現している。

案内人： 株式会社サカモト 代表取締役社長 大沼毅彦氏

取締役 大沼育美氏

技術部主任 赤塚慶太氏

総務部 安倍知亮氏

内 容：宮城県柴田町の豊かな里山に佇む「さとのえ(里の家)」は、林業と住宅建築を手がける株式会社サカモトが、自社林と地域の未来を見据えて建てた拠点である。単なるモデルハウスにとどまらず、「木と暮らしの再接続」を目指すこの施設は、自然との共生を体感できる“コモンハウス”として設計された。



建築は、母屋(主生活棟)、エネルギー棟(薪・太陽熱・ボイラーによる自給エネルギー施設)、調理・収納用の小屋から成り、いずれも自社保有林で育まれた杉や桧を主材とする。壁は土壁、天井には竹小舞など、伝統技術と現代の環境配慮型設計が融合されている。深い軒や縁側、パチカ、土間キッチンなどの要素が随所に見られ、気候風土に適したパッシブ設計と再生可能エネルギーの活用によって、快適かつ省エネな暮らしの提案を実現している。





■広い視界を保ちつつ、保温性も担保したサッシ



■模造住宅の技術を駆使しながら解放感のある空間を作っている

このプロジェクトの基礎には、2018 年から行われた「成田プロジェクト」と呼ばれる、風土・生態・暮らしに関する調査がある。そこでは地域の歴史や自然、住まいの在り方を見つめ直し、「森を知ること、自分たちの暮らしを知ること」という思想のもとに建築が構想された。都市部で暮らす人々や子育て世代に向けて、木にふれ、火を使い、風土を感じる体験を提供することがこの拠点の主な目的である。



2022 年秋に母屋が、翌 23 年春にはエネルギー棟が竣工し、現在はワークショップや見学会、相談会などが開催されている。「自然と人の間に拠点を置く」という考え方のもと、訪れる人々に森と共にある暮らしの可能性を提示し続けている。

考 察：「さとのえ」は、自然と人との関係を再構築するモデルとして設計された木造建築である。自社林のスギやヒノキを活かした構造は、素材のもつ時間や風合い、土地とのつながりを実感させる。気候風土への適応を意識したパッシブデザインであり、伝統的知恵と現代技術の融合が実現されている。



■床の間を作りつつ続き間を実現させる技つかい



■寄りあえる大広間と 2 階部分も一体となり室内の保温も共有できる

エネルギー棟では薪ボイラーや太陽熱温水器で生活の熱量を確保し、かまどで米を炊き食する体験を可能としており、熱や水を自給する暮らしが具体的に示されている。エコは理念ではなく、日々の選択として木造建築の可能性を示し、さらに暮らしの中での木材の利用を提案している。

コモンハウスとしては、自然体験やワークショップを通じて都市と里山をつなぐ役割を担っている。



建築はまだ始まったばかりの存在であり、素材の変化や記憶の蓄積を通して、建築物の経年変化と持続可能な暮らしの提案の場として成熟していくことが期待される。さとのえは、生き方や選択の場として、次世代に引き継がれるべき拠点である。

2 日目 5月23日(金)

視察⑥「PARKWOOD 高森」(2019 年 WD 賞農林水産大臣賞受賞作品)見学

HP: [「PARKWOOD 高森」竣工](#)

案内人: 株式会社 泉パークタウンサービス

不動産事業部長 遠藤 雄二氏

不動産営業課 山崎州太郎氏

施設概要: 日本初となる中高層木造ハイブリッド建築を実現する技術の実証として鉄骨造の一部を木造化した集合住宅。床や耐震壁に CLT を採用した 10 階建ての高層建築。



CLT の活用により、鉄筋コンクリート造に比べて工期を約 3 ヶ月短縮し、建物の軽量化による施工負担の軽減も可能とする。耐火性能や遮音性能の技術検証を行い、安全性とコストメリットを両立する。国産木材の活用を促進し、今後の非住宅分野への木造建築の展開にも貢献する技術である。



考察： 泉パークタウンは「人と自然が調和するまち」を理念に、広大な緑地と多様な施設が調和する快適な都市環境を形成している。一方、「PARK WOOD 高森」はその理念を都市型木造住宅として具現化した建築であり、CLTや燃エンウッドといった最新の木質技術を採用することで、環境性・快適性・安全性を高次元で両立している。



木の温もりに包まれた落ち着いた住環境は、購入者特に高齢者にも安心感を与え、また高いセキュリティが担保できる地域であることや上質な内装から、高所得層のニーズにも応えている。泉パークタウン全体の魅力を引き継ぎつつ、新たな木造都市住宅の可能性を提示する先進的な試みとして注目される。控えめな規模でも、木材を“見せる”設計と快適性が日常に違いをもたらす可能性を感じました。

視察⑦ウッドライズ仙台 2024 年 WD 賞受賞作品

HP: [ウッドライズ仙台](#)



案内人： 株式会社竹中工務店 東北支店 営業部 営業1グループ長 佐藤 英樹氏

施設概要： ウッドライズ仙台は、木造・木質を活用した環境配慮型オフィスビルの再開発プロジェクト。

建物は木調の外観を特徴とし、広瀬通りの美しい銀杏並木と調和し、仙台の自然の移ろいを感じさせるオフィス空間を提供する。

東北で生まれた木材が、オフィスや街に経年変化をもたらし、自然と共鳴する美しい空間を創出する。一部構造材には木材を使用し、デザインの自由度を高め、木質の共有バルコニーや内装がオフィスワーカーのウェルネスや生産性向上を支援する。耐火集成材「燃エンウッド」を活用し、東北圏の地産地消型サプライチェーンを構築する。さらに、竹中工務店の「森林グランドサイクル®」の考えに基づき、森林再生や林業活性化を通じて、地方創生にも貢献することを目指している。



■地元出身の建築士によってデザインされたオブジェ



■ウッドライズ仙台の構造説明

考察：

ウッドライズ仙台は、東北を代表する木造耐火高層建築として、その構造的な先進性と同時に、地域資源を活用した木材利用や内装の質の高さが印象的であった。

1. 地域材の活用と木材利用の工夫

建物には宮城県産スギ材を中心に、構造材・仕上げ材としてふんだんに国産材が使用されている。柱・梁に見られる太いスギ材は、CLT(直交集成板)やLVL(単板積層材)などの新技術も取り入れつつ、防火性能を担保した設計となっていた。内装材には、木肌の美しさを活かした無垢材が用いられ、木特有の温もりや柔らかさが随所に感じられた。



2. 家具と木工製品の魅力

共用ラウンジやオフィスフロアの家具は、地元宮城工房を構える木工職人たちの手によるもので、地元の木材を使用した一点一点丁寧な造作が特徴的である。特に、伝統木工技術が生きる曲げ木の椅子や、無垢板を活かしたテーブルは、実用性と美術性を兼ね備えており、空間の質を高めている。



3. 焼き物と地域文化の融合

壁面装飾には、宮城の歴史ある焼き物パネルが使われていた。この陶板は、土の質感や釉薬の深みを生かしたデザインで、木材の有機的な風合いとよく調和しており、視覚的にも温かみのある印象を与える。地域の工芸文化を現代建築に融合させた好例である。



4. 環境・快適性とデザインの両立

木材がもつ断熱・調湿効果により、建物内部は夏場でも温度が安定しており、省エネルギー設計が実現されている。また、自然光を取り入れる大開口部と、木の反射光による柔らかな照明環境が心地よい空間を生んでいた。

さらに、東北の風土に根ざしたデザインと技術が一体となっており、建築全体に「地域に育まれた空間」という理念が感じられた。

総括

『ウッドライズ仙台』は、単なる木造建築の実例にとどまらず、地域材・地元工芸・環境配慮・デザインの四軸が高次元で融合したモデルケースである。地域の木材を都市建築に活かすという実践が、ここでは文化の継承と産業の活性化、そして暮らしの豊かさの提案へとつながっていた。

